読解『失楽園』

道家弘一郎

A Reading of *Paradise Lost*

As his lifework, Milton tried to write a great work expressing Christian truth with the highest beauty attainable in poetry, which he realized in *Paradise Lost*. Therefore, *Paradise Lost* represents the whole world as is portrayed in the Bible from Genesis to Revelation, that is the world of whole time and space. Consequently, the work can only be considered an epic. Unlike the Bible, *Paradise Lost* begins *in medias res* with a scene of hell, maintaining epic decorum, although creation is one of its main themes.

Paradise Lost consists of twelve books, of which the first half discusses the world before the birth of man, and presents the situation where Adam and Eve are to be placed. The first chapter of the paper is entitled "the magnetic field of super-natural powers," in which Good and Evil strive against each other over human beings. Satan is the most important hero, whose relation with other fallen angels is an analogy of the human society. Abdiel should be noticed as an exemplary type of Adam. "Pride" is the cause of rebellion both for the fallen angels and human beings, whereas "thunder" is the voice of judgment and the weapon of banishment. The war in heaven during three days represents all types of battles experienced in human history. The invention of the cannon leads to the destruction of the natural environment.

Two chapters will be published in the following issues. The theme of the second chapter is God's love and justice. In the third chapter, human relations are discussed.

緒言
一、超越界の磁場
二、贖罪・創造・審判
三、孤独と愛と社会

緒　言

ミルトンは彼の使命を「キリスト教の真理を詩が達し得る最高の美しさで一篇の大作に表現する」ことと考えていた。これは吉田健一『英国の文学』（一九六三、132ページ）のなかにある言葉である。ミルトン研究者が言ったのなら驚きはしないが、吉田健一のようなタイプの批評家の言であることに、私はかねてから強い印象を受けていた。

ここには二つのことが指摘されている。「キリスト教の真理」と「詩の美しさ」である。しかも、それは断片にとどまってはならず、大作でなければならない。その点で『復楽園』や『闘士サムソン』は、キリスト教の真理を語るとはいえ聖書の一エピソードに基づくだけの作品であるから、十分な資格はない。「キリスト教の真理」というからには、天地の創造（創世記）から最後の審判をへて新しい天地の到来（黙示録）に至るまでの、すべての空間と時間と、そこにおけるすべての活動を網羅包括するもの、すなわち、その作品は旧新約聖書全巻の内容と一致するものでなければならない。そして、それを実現したものが『失楽園』であった。

平井正穂教授の晩年のミルトン研究のなかに、次のような言葉がある、「人生問題は基本的には、自然と愛と時間という三つの課題に帰するのではないか、と私はいつのまにか思うようになった。…イギリス文学、とくにその詩も、これら三つの問題を'key-theme'としている、と確信するようになった。われわれ人間は、生まれ、愛し、そして死んでゆく。われわれ人間は、空間と時間のなかに存在し、人間関係を営み、そしてやがて地上から姿を消してゆく。私は、これら三つの主題について考えれば考えるほど、そこに、それらの主題の基底に、なんらかの形で宗教的な、信仰の問題が存在していることを自覚させられてきた」(『イギリス文学論集』、22ページ)。

生涯を英文学の研究に捧げた学究の、このように根本的な問いに、応えうる作品は『失楽園』であった。そしてこの三つの主題を『失楽園』のなかに探って、次の四つの論文が書かれた。

『失楽園』における黙示録的ヴィジョン
『失楽園』における愛の問題
『失楽園』における自然の問題
『失楽園』における時間の問題

「自然」では、自然(nature)の原義が誕生(birth)であることからも分かるように、混沌(ケイオス)から宇宙(コスモス)の創造されることが論じられ、「愛」では神の愛(アガペー)と人間の愛(エロス)が、「時間」では死が、そして「黙示録」では世界の終焉と個人の死がdissolutionという同じ言葉で表現されることの意味が探究された。これは『失楽園』という作品には、創世記から黙示録にいたるキリスト教全体の問題が包含されていることの一つの証拠である。

そしてそれはほかでもなく『失楽園』の開巻劈頭二十六行のインヴォケイション（詩神への祈り）のなかに示されている。とくに初版（一六六七）には現行版のように「梗概（*The Argument*）」は付いていなかった。各巻冒頭に「梗概」がつけられたのは再版（一六七四）以降である。だから第一巻のインヴォケイションには全十二巻の The Argument であるという意味合いが濃い。したがって、この二十六行には特別の注意を払う必要がある。

原罪と贖罪（『失楽園』第一巻一―五行、以下一1―5と略記）という旧新約聖書の最も重要なカイロス的時間が、天地創造以来の全クロノス的時間（一9―26）のなかに抱きとめられている。扱う空間も旧約（一7）から新約（一10―12）へ、さらに異教の地（一15）へと拡がる。「シロアの流れ」（一11）はイエス（シロアム、すなわち「遣わされた者」）が生まれつきの盲人を医された奇蹟（ヨハネ九1―12）に因み、「わが内なる暗きを照らしたまえ」（一22―23）という祈りに響き合う。同時に、「イオニアの山より高き」（一15）飛翔への願いは「低きを高め、支えたまえ」（一23）という祈りとなり、古典詩人に圧倒的な魅力を感じながらも、なお彼らを凌駕しなければならない使命感をあらわす。古典の「詩神」（一6）に「天の」というエピセットを付さなければならなかった詩人は、神殿よりも精神を、肉体よりも霊魂を追い求めるまゝ、より端的に「おゝ、霊よ」（一17）と呼びかける。

このインヴォケイションは、その後三回、第三巻・第七巻・第九巻の冒頭に繰返されるインヴォケイションとは異なり、『失楽園』全十二巻に対するインヴォケイションであり、その主題を示すものである。ほとんど各行がやがて各巻で敷衍・展開される主題を先取りし示唆している。しかも'Of Man. . . .to men'という二六行のなかに全時間と全空間が包摂され、同じ Man でありながら第一行初めの Man は最初の「人間」アダムであり、第四行末の Man は

第二のアダムといわれるキリスト、すなわち「神」である。同じく第一二行と第二六行にGodという語が繰返されるが前者はまだ神殿に住む「民族の神」の性格を免れないが、後者は普遍的な「万民の神」である。ManとGodにみられる、このような意味内容の上昇は、インヴォケイションすなわち「祈り」の対象がMuse（一6）からSpirit（一17）へ移行するのと平行関係にある。このように、わずか二六行を読み進む間にも、上方に向かって無限に拡がる感じがする。

とくに最後の六行は、聖霊の鳩が深淵の上に翼を拡げる場面から始まって、Abyss, dark, Illumine, low, raise, support, highth, great, Eternal と一語また一語、語を重ねるごとに高まって最後の二行に至る。「永遠の摂理」（一25）のProvidenceは単に突き放した予見ではなく、provideやprovisionという同一語源の語からも分かるとおり、神が人間に必要なものを与えて養いたもう愛をあらわす。'And justify the ways of God to men'（一26）は最後に神の行為の正しさを、神の義の貫徹を証しすることである。

一、超越界の磁場
――神と悪魔との間で――

叙事詩作法

では何故、『失楽園』は聖書と同じ順序で、すなわち創世記から始まって黙示録に至る順序で描かれないのか。叙事詩は叙事詩の作法にしたがって、「事件の中程から」（in medias res）書かれなければならないからだ、という。

『失楽園』第一巻に描かれる地獄が「事件の中程」であるとは、どういうことか。実は『失楽園』の時間は、天地

の創造以前から始まるのである。『失楽園』の筋を時系列（chronological order）に並べかえた解説に、繁野天来が翻訳の冒頭に付した「失楽園物語」がある。それは次のような書き出しである。

（一）　大謀叛

太古、日月がまだ形を成さなかつた頃に、造化の大神俄かに思し立たれた一大事があつて、八百万の天使達をば天津高御座の御前に呼び集められた。召に応じて、或は百、或は千、或は万、隊を組み、列を整へ、色さま〴〵の旗押し立てゝ、天馬の嘶いさましく、雲のごとく、星のごとくに群つて来た。やがて、仰ぐ目ばゆい光明の裡から尊い御声が聞えると、一同威儀を正して拝聴した。大御言はかうであつた、

「朕、此度、一子を設けて、諸神の首位に置き、天国の政を摂けしめる。その命に背く者は、朕が命に背く者と同じく、天罰立ちどころに下つて、暗黒な底知らぬ奈落に墜ちるであらう。」

一同天意をかしこみ、今日の佳い日を祝ふ為に、妙なる楽の調に連れて、羽衣軽く舞ひ、歌ひ、仙桃に飽き、霊酒に酔つて、歓声笑語は天空を撼がした。

これは『失楽園』第五巻577行から615行にかけて、天使ラファエルがアダムに語る、先在のキリスト「高挙（the Exaltation）」の箇所である。この神の布告に対するセイタンの反発、反逆分子の糾合。繁野の「失楽園物語」は、このあと以下の項目を立てて進む、（一）激戦、（三）奈落、（四）衆魔会、（五）遠征、（六）安楽園、（七）怪夢、（八）毒蛇、（九）堕落、（十）神裁、（十一）失楽園。先の神の布告が一切の発端であった。

『失楽園』第一巻は「（三）奈落」の段階に当り、いかにも事件の中程である。繁野の文章は引用が示すとおり、ま

ことに達者な講談調である。講談は江戸時代には講釈とよばれ、太平記読みに始まる、という。そのような文体のせいか、繁野の解説も、「(二) 激戦」における天魔両軍合戦の箇所などにおいて、最も精彩を放つ。ここは『失楽園』本文では第六巻にあり、現代の読者にはいささか冗長に思われる箇所なのに、それをこれほど生き生きと描き出す繁野の力量には感服する。が、その反面、第三巻における神とキリストとの対話や、第七巻における天地の創造や、第十一・十二巻の人類救済の歴史には、まったく触れないというに近い。これは繁野の文体のせいからばかりではない。

ところで『失楽園』本文において、この詩の中心主題として巻頭に宣言された人間の反逆、その結果としての死と苦しみの現実は、十分に描かれたのだろうか。この作品のなかで人間が生きたのは、堕落以前のエデンでの、アダムとイーヴふたりきりの、まだ子どもが生まれる前の、僅かな新婚生活の間だけである。それ以外はすべて聞かされた過去の経緯(いきさつ)か、未来の予測だけである。それにもかかわらず、全一〇五六五行にわたる超大作の主人公がアダムだといわれるのは、なぜか。

劇 *Adam Unparadised*

「人間とは何か」(『闘士サムソン』667) と、最も普遍的な問題を最も根元的に問うことに決したミルトンが、アーサー王伝説に題材をとるのをやめて、アダムを描くことに行きつかざるをえなかったことは、『ケインブリヂ覚書』が示すところだ。*Adam Unparadised* がその表題であった。そしてアダムを主人公として採りあげることには先例があった。フーゴー・グロティウス (Hugo Grotius, 1583–1645) の *Adamus Exul* (『楽園を追われたアダム』一六〇一) である (越智文雄博士の翻訳があり、以下それに拠る)。五幕から成り、二〇四二行にわたる。『闘士サムソン』の一七五八行を超える長さの劇である。

しかし、アダムを主人公にする劇にはおのずから、少なくとも二つの制約があった。一つは堕落以前のイーヴやア

ダムを舞台に登場させることはできない。肝心な箇所は堕落後の「着衣のイーヴ」の回想としてしか上演できない。もう一つは、登場人物が人間としてはアダムとイーヴのふたりだけという人間関係の稀薄な劇とならざるをえない。いずれの面からも上演不能、読むだけのLesedramaとならざるをえないことは明らかである。第一幕の登場人物は、サタン、コーラス、第二幕はアダムと天使とエバとコーラス、第三幕はサタンとアダムとコーラス、第四幕はエバ、サタン、アダム、コーラス、第五幕はサタン、アダム、エバ、神の声である。第一幕は、サタンが地獄から逃れ、エデンに到達したところから始まる。それ以降の展開は、ほゞ『失楽園』と同じである。最初の四幕は四幕とも天使のコーラスで終るが、最後の第五幕は、エバと、次いでアダムの言葉で終る。このようにアダムを主人公にすれば、エバ以外の対話者は超自然的存在とならざるをえなかった。

しかし、『失楽園』との違いにも気付く。『失楽園』の末尾では、創世記の記事（三24）に則り、彗星のように輝き燃えるのは神の剣（十二633）や天使たちの武器（十二644）だけであるが、グロティウスの『楽園を追われたアダム』では、エバは楽園の高い木々が「火がなくて燃え」、森全体が流星の輝く空のように輝くのを見る。それゆえ「森全体が燃えるのです。わたしの結婚の床にふさわしいこれらの炬火（たいまつ）が、一段と明るく光を放ちます。このしるしによって、人間の子孫は自分の故郷を認識して欲しいものです」という。それに応えてアダムは、

われわれは、これらの火熱を逃れよう。これらは、神聖な御手のわざであって、われらに追放の旅に出よと、命じているのだ。おお、偉大なる支配者よ、おお、天の統治者よ。もはや、わたしは抵抗しない。わたしは自発的に、痺れた手足に支えられて立ち去りたい。そうは言っても、膝はよろめき、そして歩くたびに、後方に引きづられて、わたしは運ばれてゆくのだ。哀れにもこのわたしは、いずこに向って立ち去ろうというのか。

そこは「以前の幸運のどんなしるしも残っておらず、失われた楽園と果実をわたしの心に呼び戻すことがないように、わたしが罪悪におぼれているときの何一つのものも残っていない」場所である。心機一転、出直そうとの覚悟である。それゆえ、もう「決して二度と見られることのない…祝福された森、永遠の春、幸福な地域」を最後に瞼の底におさめて、永遠に別れをつげる。

わたしはたち去る。死をもたらす罪科よ。諸病の恐ろしい災害よ。失神する無気力よ。熱病の恐るべき痙攣よ。労働と痛苦よ。そしてさし迫った災禍の集積よ、汝らわれと共に行かん。悲惨な追放の案内者としてだ。

神が与えた罰、もう懲り懲りの罰を、案内者（ガイド）として、現世の新生活を始めようというのだ。これは『失楽園』のアダムが、Providence（前述のような含蓄をもつ摂理、十二647）を案内者として楽園を去るのとは根本的に違う。楽園の焼失（消失？）とともに、神話に依存しない現世的な生活が始まろうとしているのである。私はここにダントレーヴ（『自然法』）のグロティウス評を想い出さずにはいられない。

グロティウスは、なおも深くキリスト教精神に浸り切っていた…しかし、神学的論争がもはや、人々を信服させるような法体系を樹立する能力を漸次失いつつあった時代において…神学的な前提に依存しない法理論を築き上げることが可能であることを証明した（76—77）。

この劇は、グロティウスがまだ十八歳という若い時の作品ながら、後に「近代の自然法理論の創立者」（73）と称えられることになる人物の片鱗をうかがわせるものである。

人間をその類型（character）ではなく原型（archetype）で追求すれば、主人公がアダムとならざるをえないことは自明の理である。アダムという言葉自体が、ヘブライ語で「人」または「男」を意味する。しかしアダムを主人公とするとして、いったんはグロティウスの *Adamus Exul* にあやかって *Adam Unparadised* という劇を構想したにもかかわらず、ミルトンにとって、なぜ、それが悲劇ではなく、叙事詩でなければならなかったのか。

アリストテレス『詩学』の最終章（第二十六章）は、叙事詩と悲劇の優劣を論じた箇所である。

叙事詩　「叙事詩の方は、さまざまの物真似の身振りの仕種をいささかも必要とはしない教養ある観客に適した芸術であり、これに対して、悲劇の方は、低俗な観客に適したものである」（岩波版『アリストテレス全集17』111）という評価がある。それに対し、過剰な演技で俗受けを狙うことは叙事詩の吟誦の際にもありうることであり、舞踊が芸術として拒否されるものでない以上、下品な身振りの動きさえ却ければよい、また、悲劇は上演されるのを見なくても、朗読するのを聞くだけでその内容が分かる、つまりLesedramaの可能性があるなどの点は叙事詩と同じである、と反論される。

むしろ悲劇は次の四つの点で叙事詩にまさっている、という。

(1)　悲劇は叙事詩の持っている長所をすべてもっている。

(2)　悲劇は、音楽と舞台装置、とくに音楽によって生き生きとした魅力をもつ。

(3) 悲劇は、叙事詩よりも短いことで純度の高い、より大きな快感を与えることができる。

(4) 叙事詩の描写は悲劇にくらべて統一性が弱い。

以上の点から、「悲劇は、叙事詩よりもその詩的効果を挙げ得るものとして、より高級な芸術形式といえる」（研究社版『詩学』93）とアリストテレスはいう。

しかしルネッサンスになると、両者の地位は逆転する。たとえばフィリップ・シドニーの『詩の弁護』（一五七九／八〇―一五八三／八四制作と推定、出版は死後の一五九五）では、「英雄詩（すなわち叙事詩）は、一つの真理を教えてそこへ導くにとどまらず、最高至上の真理を教えてそこへ導くものであり、精神の偉大さや正義をして、あらゆる恐怖の霞や欲望の霧のなかにあって、それをすかして照り輝かせるものである。…それは、最善にして、最も完成された種類の詩（the best and most accomplished kind of Poetry）である」となる（研究社版64―65、*The Prose Works of Sir Philip Sidney* III. 25）。

シドニーにとって最高の叙事詩は『アエネーイス』であり、主人公アエネアスは理想の人物であった。その高邁な姿は万人の心に等しく優れた者になりたいという願望を燃えたたせ、かつ、如何にしたらそうなることができるかの術を教える、彼はその生涯のあらゆる局面において、精神においても行動においても卓越性を示している、という。

叙事詩のなかには数篇の悲劇の素材があって、それゆえ叙事詩には統一性がない、といったアリストテレスの批判(4)が、そのままシドニーでは、叙事詩の英雄があらゆる境遇に高邁に対処したことの例証とされる。アリストテレスが統一（ユニティ）を重視するところで、シドニーは充溢（プレニテュード）を追求している。

だが、このような理想的英雄を描いた『アエネーイス』さえ、ローマ帝国の起源と発展をうたい、その優れた国是を賛美する愛国的国民的叙事詩にほかならなかった。ミルトンの目指したものは全人類的普遍的叙事詩であった。それは『アエネーイス』に「劣るどころか、むしろ遥かに英雄的な主題」（九13—14）をうたう叙事詩でなければならなかった。

英雄像の転換

今まで唯一の英雄的な主題とみなされてきたものは戦いであった。「虚構の戦場において空想上の騎士たちが長々とくどいほど残虐な殺戮」（九29—31）を行なう戦闘を描くことであった。それにくらべれば「忍耐というさらに立派な不屈の勇気や、英雄的な殉教の死などは全く歌われてこなかった」（九31—33）。

第一巻のセイタンの台詞に、‘to be weak is miserable,/Doing or suffering. . . .’「弱いということは惨めなことだ、事を為すにも耐えて忍ぶにも」（一157—158）という行がある。doing と suffering は人間の様態における能動と受動という正反対の側面をあらわす。suffer は『オックスフォード英語辞典』に、この行が引用され、‘4. To be the object of an action, be acted upon, be passive. Now *rare*.’とある。『失楽園』では doing の最左翼にセイタンがおり、suffering の最右翼にイエス・キリストがいる。従来の叙事詩に描かれたのは行動の英雄であったが、ここではイエスが殉教の英雄として描かれるに至る。そして行動の英雄ではなく the Suffering Servant（苦難の僕）こそ真の英雄であることを示すことにより、ミルトンは英雄像のコペルニクス的転換を行なった、とステッドマンは言う（John M. Steadman, *Milton and the Renaissance Hero*, p. vii）。

しかし叙事詩に不可欠な必須項目は戦闘場面である。華麗な合戦絵巻がなければならなかった。

races and games,

Or tilting furniture, emblazoned shields,
Impresses qaint, caparisons and steeds,
Bases and tinsel trappings, gorgeous knights
At joust and tournament. . .　　IX. 33–37

race（競争）や game（競技）はよいとして、以下、諸家の翻訳を引用すれば

tilting furniture　試合の武装、馬上試合の完全装備
emblazoned shield　華美に描ける楯、紋章つきの盾
impress qaint　奇しき紋章、楯の精巧なる意匠
caparison　馬の美装（よそおい）、馬鎧
steed　軍馬
base　鎧の短袴、腰鎧、馬衣、馬服
tinsel trapping　金銀箔の飾り馬具、金襴銀糸の馬飾り
joust（馬上）槍試合
tournament　模擬戦、馬上競技

有職故実の図鑑を見るのでもなければ、到底明確なイメージをもつことができない。

あるいはまたもう一つの叙事詩の定石 'marshalled feast/Served up in hall with sewers and seneshals'（IX 37–

38)「給士頭や執事にかしずかれて麗々しく賓客の居並ぶ大広間での宴会」も、私にはそのような映画の場面を連想するしかない。

いずれにしても、これらはミルトンが否定的な意味合いで描いている場面である。だから単に単語の羅列でしかないが、それによって旧い叙事詩への連想を喚起し、その華やかな富をも、彼が目指す最高の叙事詩の、いっそう広く豊かな世界のなかに包みこもうとしている。

もう一つ例をあげれば、第一巻における堕天使の大軍勢の描写に、『イーリアス』やアーサー王伝説にみられる大軍団を epic simile として用いている箇所（一573—587）である。

all who since, baptized or infidel,
Jousted in Aspramont, or Montalban,
Damasco, or Marocco, or Trebisond,
Or whom Biserta sent from Afric shore
When Charlemain with all his peerage fell
By Fontarabbia. . . .　　1. 582–587.

この地名の羅列は、かつてエリオットが‘a solemn game’と批判した箇所（十一388—396）を連想させる（T.S. Eliot, 'Milton I'）。

ミルトンはアダムを原点（零点）とした座標軸を設定し、プラスの方向にもマイナスの方向にも大きく翼を拡げている。『失楽園』も叙事詩であるかぎり、叙事詩作法（epic decorum）にしたがって戦闘場面を欠くことはできない。それが第六巻のセイタンとイエスの合戦である。しかし中心は旧来型の叙事詩のロマンティックな華やかさではなく、むしろ終末論的ないし黙示録的な様相をおびた戦いである。それもそのはず、セイタンとその一味は神に謀反をおこし、戦いを挑み、敗れ、裁かれ、地獄に堕されたのである。われわれの知るこの世界が創造される以前の出来事、いわば世界史以前、あるいは前世界史とはいえ、一つの世界が終焉をみたのである。宇宙史の一ページにほかならなかった。だが、これで大規模な宇宙戦争が終ったことも興味ぶかい。この後に来る審判は万物が浄化の火によって消滅（dissolve）し、その灰燼のなかから不死鳥のように新しい天地があらわれるという審判である。すでに救済は約束されており、万物の復興と宇宙の完成が、実にセイタンの復帰さえも期待される審判である。

さて、溯って『失楽園』の時間は、天上における先在のイエスの「高挙」に始まるものであった。それへの嫉妬から神命に背いた結果、地獄に苦しむセイタンたちの姿が第一・二巻の描写である。これはやがてその轍を踏んで二の舞を演じた人間の窮境を予示している。セイタンの反逆も審判も苦悩も、すべてはアダムのそれの前哨戦である。アダムは第二のセイタンである。そこに第一・二巻に展開される劇が取りも直さず人間の劇、「反抗的人間」の劇として共感できる理由がある。それを保証するかのように、天使ラファエルはアダムに面白いことを語っている。

中間史

人間の感覚では理解できないことを

分かりやすくするために、霊的なものを物的なものに
なぞらえて話すことにしよう――もっとも、この地上は
天上の影にすぎず、そこにあるものは
地上で考えられているよりも遥かに
互いに似ているかもしれない　（五571―576）

似ているどころか天使も人間と同じ食物を食べる（五404―413）。これはミルトンに特有な物心一元論（monism）に由来するが、その点は後に触れる。

『失楽園』の前半は主に超越界の出来事であり、後半が人間界の出来事である。セイタンの追放が欠員補充のために人間の創造となり、セイタンは復讐のために人間の堕落を目論む。それを予見したイエスは、人間の堕落以前に、すでに救済を天上で約束する。人間アダムは、神と悪魔、善と悪、二つの力に引っぱられる強力な磁場の真ん中に置かれる。

一方、このような磁力に反応する要素が人間そのもののなかに存在する。新約聖書のギリシア語によれば、人間とはpsyche（魂）とsoma（体）の複合体である（ヘブライ語ではこれをnephesh の一語で表わし、分解しない）。psycheが上に、soma が下に位置する。そしてpsyche の上にはpneuma（霊）が接し、soma の下にsarx（肉）が接する。人間固有の領域はpsyche×soma の複合体であるが、超越界の属性であるpneumaとsarxは、それぞれ人間に支配力を揮おうとする。超越界における神と悪魔の戦いは霊・肉の戦いであり、それが人間界においては霊が魂に働きかけ

肉が体にとりついて、霊魂と肉体の葛藤となってあらわれる。こうして人間は超越界の戦いを人間内部の戦いとして敏感に意識する。逆に、本来、超越界を直接知ることのできない人間としてみれば、自己の内なる戦いを通してのみ、超越界の消息を推測することができるだけである。卑近な例をあげれば、手許の小さなフィルムを大きな画面に拡大してみるように、人間界の事柄を超越界に推し当てても大きくは誤らないだろうと思う。

その意味で第一・二巻における悪魔の窮境は人間の窮境そのものである。その共感がなければ、そもそもこの物語のなかに入ってゆくことができない。われわれ読者がセイタンに惹きつけられる最大のものは、あの強烈な自我である。いま地獄の苦しみが何であれ、かかる悲惨をもたらした原因が何であれ、それに怯むことのない不動心（that fixed mind, I. 97）であり、威信を傷つけられたことから生じた激しい怒り（high disdain, I. 98）である。これが、全能者とさえ互角に渡り合わせたのだ、敗れたりとはいえ何するものぞ、「すべてが失われたわけではない――まだ、不屈不撓の意志、復讐への飽くなき心、永久に癒すべからざる憎悪の念、降伏も帰順も知らぬ勇気があるのだ」（一106―108）と、うそぶく。これは、戦いに敗れ、死に瀕しながら、なお勇気百倍すといったアングロサクソンの英雄を連想させる（平井正穂『ミルトン』193）。

では、何がセイタンをこんなに奮い立たせているのか。自分の価値が認められなかったという思い（sense of injured merit, I. 98）である。これがセイタンの誇りを傷つけ、憎しみを植えつける（一58）。

'Pride' 考

ところでprideという言葉ほど注意を用する言葉はない。ミルトンの、特にこの作品においては最も重要な言葉である。ＯＥＤによれば第一にPrideは七つの大罪の第一にかぞえられる罪であって、傲慢を意味する。過大な自己評価・自負心で、他者への優越感や軽蔑を生みだす（四809）。一方では、自己の価値や品位を落と

すような振舞い・行ないを抑制する自制心・自重心ともなる（一527）。前者は十世紀末に、後者は十三世紀末に、最初の用例が見られ、『失楽園』には、その両方がある。

日本語では前者は「驕り（おご）」、後者は「誇り（ほこ）」に当る。しばしば少年たちは、「誇り」をもって行動せよ、と諭される。だが、『日本国語大辞典　第二版』によれば、「誇・矜（ほこり）」は得意になり自慢することであり、語源は「オゴル」、すなわち「オホ（大）ゴル」の上を略したものとしている。その外にもいろいろな語源が挙げられているが、どれも良い意味になるとは思えない。一方「驕（おごり）・奢」の語源は「大きがる‥‥オホ（大）ゴルの意か」を始めとして、「オホホコル（大誇）の約」、「ホコル（誇）の転」、「思い揚るの意からアガル（揚）の転」、「オホゴトアル（大言有）」、「雄凝ル」の意、としたものから、さらに「終わりに懲ルルからか。また、大にハビコルからか」という説までくると、『失楽園』の全体を一言で要約したようにも思われ、可笑しくなる。

なお、ついでながら漢字においても、『大字典』には、驕は「馬の高さ六尺のもの」、馬疾走して控制をうけず「ホコル、高ブル、オゴル、馴レズ、ホシイママニス」の意とあり、誇は「もと大言を吐きて人に驕る義」とあり、「誇は仰山にホコリいふこと。矜は我賢しと自慢すること。伐は自称二其功一也と注す、手柄自慢すること」と三者を区別する。『大漢和辞典』には、矜恃の項に、「自己の行にほこりをもつ。おごつて自らをたのむ。〔呉志、陸遜傳〕或公室貴戚、各自矜恃、不二相聽從一」とある。矜持も決して良い意味ではなく、その反意語は聴従であることが分かる。これはまたおのずから、われわれの思いを『失楽園』第一巻第一行につれもどす。

不聴従とは、disobedience の訳語として正に言いえて妙といわなければならない。obedience の語源はラテン語 obedire にさかのぼり、「耳を傾けて聞くこと」、まさしく聴従を意味する。その典型が御子キリストである。「子としての聴従」（Filial obedience, III. 269）と称えられ、それは彼が「偉大なる父の意志に従う」（he attends the will/Of

his great Father, III. 270–271）ことである。‘attend’は、先づ「耳を傾ける」ことを意味する（cf. OED 1. 1.）のだから、「聴従」が一番ぴったりの言葉である。

ところで先にも引用したセイタンの台詞、

What though the field be lost?
All is not lost; the unconquerable will,
And study of revenge, immortal hate,
And courage never submit or yield. . . .　　1. 105–108.

これは『失楽園』にあらわれる最初の台詞（セリフ）であるが、オックスフォード大学教授ヘレン・ガードナー女史は一九六二（昭37）年トロント大学で行なった連続講演（アレグザンダー講演）のなかで、この一節において「詩的崇高の極致が達成された。けだし、わが英国の文学において常に畏敬と驚嘆の念をおこさせずにはおかない、一つの美徳の最高の表現である。それは逆境にあっての忍耐、もはや何の希望もないときの勇気・・・あらゆる美徳のなかで最も重要なもの、それなしには他のどんな美徳も花開くことのない根本の美徳」である、と称えている。そしてその実例として一九四〇年のドゴール将軍をあげている（Helen Gardner, *A Reading of Paradise Lost*, pp. 60–61）。

だが、悪魔にたとえられてはドゴールが気の毒ではないか。ドゴールには命をかける大義があった。が、セイタンは全く自己中心的な動機から全天使を二分する大戦争を惹きおこしたのである。その点、ハーバード大学教授ダグラ

ス・ブッシュが一九四四（昭19）年秋、コーネル大学での連続講演において、ヒットラーにたとえた譬えの方が正鵠を射ている。セイタンは「不屈不撓の意志（the unconqerable will, 1. 106）」という。しかしこれは「宗教的倫理的意志ではなく、反宗教的自然主義的な力への意志」であり、セイタンが高言する「屈することも従うこともない勇気（courage never to submit or yield, 1. 108）」とは「決して眞の勇気ではなく、猟犬に追いつめられた狼の勇気、あくまでも悪行を押しとおすヒットラーの頑固さ」である、という（Douglas Bush, *Paradise Lost in Our Time*, p. 70）。

むしろ『失楽園』において真の勇気と忍耐を示したのは、命を投げだして神意を実現しようとするイエスであり、また、過ちをおかして後再び善に還る「義の僕」アブディエルの方であった。われわれはセイタンの大言壮語に眩惑されて、イエスの静謐に気付かない。「スコラ神学者」のようだ、と揶揄することさえある（Pope, Imitations of Horace: Ep. II i 102）。

神とキリスト

第一・二巻におけるセイタンの悲壮な英姿と、堕天使たちとの間に交わされる問答だけが喧伝されるが、第三巻における神と御子との問答もまた、おのずから別種の優れた形而上詩である。ここでは先ず、いよいよセイタンの接近によって予想される堕落にそなえ、十字架の贖罪が喫緊の課題となる。それゆえ神と御子との問答が贖罪から始まるのは当然である（三203―216、227―265）。だが、十字架の贖罪は時間の中点であるから、溯っては神の創造が称えられ（三374、390―391）、降っては新天新地の到来が万物の完成として寿がれる（三321―341）。こうして出発点から到達点まで、一切の時間が、宇宙の歴史がここに包括されている。これくらいキリスト教の最も重要な教義を、静かな情熱をこめ、的確で抑えた言葉で、しかも過不足なく表現した詩は稀である。繁野天来もその注釈で、

いろいろ説をなす人はある、「しかし、簡単に問ふが、曲りなりにも神の言葉をこれほど荘重典雅に綴り上げた詩が英文学史上他にあるであらうか？」と称賛している（研究社版476）。

『失楽園』においてとりわけ注目すべきことは、御子が創造から贖罪を経て審判に至るまで、父なる神の意志を体して、すべての行為の実行者であることである。父と子は別のペルソナでありながら、その間には一分の隙もないことである。まことに羨しいほど親密な親子の関係である（三168―172、315―320）。

そもそもSatan（反逆者）の反逆を誘発した原因はここにあった。それは第五巻、アダムの求めに応じたラファエルが、なぜセイタンが叛いたか、そのきっかけとなった事件を語る箇所に見出される。それは先に引用した繁野天来「失楽園物語」の書出し部分であるが、もう一度本文に即して考えたい。

ある日、神は神のまわりに幾重にも輪になるよう天使たちを召集して、宣言した、「今日、わたしは、わが独子と宣言する者を生み、この聖なる山でその頭に油を注ぎ王と定めた。彼は汝らが見るごとく今わたしの右手に坐っている。わたしは、彼を汝らの首（かしら）と定める。そして自らに誓った、天のすべての者が彼の前に跪き、彼を己の主と告白することを求めようと」（五603―608）。そして続けて、この摂政の統治のもとに、一体となって一致団結し、いつまでも幸福にくらしてもらいたい、「彼に背く者はとりも直さずわたしに背く者」であり、この統一を破る者は、ただちにその日に神を仰ぎ見る至福の座から追放され、暗黒の奈落に永久に償われることなく落ちることになる、（五609―615）と語った。これは如何にも一方的な、神の独断的宣言である。何の相談もない事後承認の強要であった。

この宣言を聞いたあとの天使たちの表情が巧みである。

with his words
All seemed well pleased; all seemed, but were not all.　　V. 616–617.

面従腹背といってもいい、appearance と reality の乖離といってもいい、そして、ここから宇宙的な大混乱がおこるのである。御子高挙を祝う大祭典の饗宴も終り、みなが眠りにつくとき、眠れない天使がいた。彼は第一位ではなかったけれど、トップクラスの大天使で、権力においても寵愛と名誉においても偉大な存在であった。が、この日、御子が父なる神によって栄光を与えられ、油を注がれた王、救世主（メシア）と宣言されるや、「傲慢（pride）」（五665）のゆえにこの光景に耐えられず、自己が不当に貶しめられたと思ったのである。そして「直属の部下」（五671）を起こして、ひそかに謀反を告げたのである。

だが、この企てが大敗北に終ったことは、第一・二巻において彼らが落とされた地獄に描かれ、三日にわたる一進一退の攻防がつぶさに語られるのは第六巻の終りである。『失楽園』全十二巻一〇五六五行のうち、その半分以上、五四二九行を費して、どうして、いわば「人類史以前」を書く必要があったのか。人類が人類になるのは第七巻以降のことである。

このような構成になったことは、もちろんミルトンの人間観によることである。「人間（アダム）」を主人公として、国民にとって「師表的（doctrinal and exemplary）」（『教会統治の理由』第二巻序）作品となるべき叙事詩を書こうとすれば、人間のはじめ如何、のち如何は、つねに作者の念頭にあったはずである。始めと終りの見通しがついて、人間の今を、如何に見るかが定まるからである。

その意味で、この作品を書き上げて、若い友人トーマス・エルウッドに見せたとき、彼は、楽園の喪失は書かれているが、楽園の回復が書かれていない、と言ったという（*The Critical Heritage*, p. 223）。彼のこの返事にミルトンは、虚をつかれて返す言葉もなく、やがて『復楽園』を書いたというエピソードが残っている。私にはこれは、いかにもエルウッドの心ない無理解としか思われない。

ミルトンは『失楽園』のなかに、楽園回復後の「人類史以降」も十分に書いているのである。最後の審判の後には、悪魔（セイタン）もその反逆性（サタニティ）を焼き清められて、元の姿にかえり（一〇574）、神がすべてにおいてすべてとなる（三341）という。地獄も、悪魔も、もはや存在しないのである（十二546―547）。このような審判以降の光景が、すでに何度も作品のなかに繰返し描かれている。それを読むときの読者の高揚感は、作者の高揚感と同じはずである。

このような前史と後史の中間に人類史があるのである。「われわれはどこから来たのか、われわれは何ものなのか、われわれはどこへ行くのか」は、古来人類の普遍的な問題である。だが、われわれが知りうるのは、この中間史だけである。しかしわれわれがこの中間史しか知らなかったら、詮方尽きたときには絶望しかなく、静かに依り頼んで力を得ることなど期待しうべくもないのである。われわれはただ不可知論に陥るだけである。

人間の現実の状況を見るとき、実存といおうと限界状況といおうと、見る状況は同じである。出口のない悲劇としか言いようはなく、不可知論がその当然の結論である。どうしてこうなったのか、救われるのか救われないのか、という思いが、どこから来て、どこへ行くのか、の問いとなる。

現実の認識が痛切であればあるほど、この問いは切実となり、絶望か、さもなければ祈りになる。『失楽園』はこの問いへの解答であった。

だが、エルウッドの感想は怪我の功名となった。これをきっかけにミルトンは、「以前には思ってもみなかったこと」（*The Critical Heritage*, p. 224）を思いついた、という。それはすなわち、前史をも後史をも一先ず措き、人類史のなかのイエスを描こうとしたのである。『復楽園』が、『闘士サムソン』を付録として（初版表紙にadded とある）一六七一年に出版された。

前史・後史は、簡単に万人の承認が得られるものではない。天地の創造も、最後の審判も、自然理性の守備範囲のなかにはない。使徒信条は第一項（「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず」）からして信仰の対象である。バートランド・ラッセルの『なぜわたしはキリスト教徒でないか』と、カール・バルトの『教義学要綱』（第八項　造り主なる神）とは、それぞれ正反対の立場から、そのことを示している。

興味ぶかいのは、ミルトンからほぼ五〇年の後、わが国に生を享けた近代日本の代表的知識人新井白石（一六五七―一七二五）の『西洋紀聞』である。表題に西洋という文字を冠した、わが国における最初の書物のなかに、キリスト教の教義の一つ一つに対する彼の反応が見られる。「西人其法を説く所、荒誕浅陋、弁ずるにもたらず」（岩波版78）というのが彼の感想であった。たとえば、天国と地獄については、こう記している。

> デウス初に天地万物を造らむとするに当りて、まづ善人を住しめむために、諸天の上にハライソを作り〈ハライソとは、漢に訳して、天堂といふ。仏氏いはゆる極楽世界のごとし〉‥‥
>
> ルウチヘルといひしアンゼルス、自ら其智なるにほこりて、称じてデウスといひ、またこれを信ぜしアンゼルスすくなからず。デウスこれをにくみて、インペルノを作りて、それにくみせし輩と共に、ことゞ〳〵く皆下界に

追下して、インペルノに居らしむ〈ルウチヘルはアンゼルスの名也。インペルノは、こゝに火坑地獄とすといふ〉(71)。

だが、このように「天地いまだ成らざる時、まづ善人のために天堂を造るの説、天地もいまだ生ぜずして、斯ノ人すでに善悪の相わかれしも心得ず」(79)という。まことにもっとも、異教圏の知識人にとって不可解というほかはなかったであろう。

だが、新しい科学が真理と虚構を峻別した十七世紀の詩人にとって、ギリシア・ローマの神話は、新井白石にとっての聖書物語と同様、所詮は「荒誕浅陋」ではなかったか。当時はかろうじて聖書神話のみが、真理の器であったのである。しかし時代が降るにつれて神話なるものの信憑性は薄れ、非神話化の解釈を経るか、もしくはそれに耐えたものでなければならなくなっていった。あるいは、その世界に没入するためには、いったん「不信を中断」('suspension of disbelief') しなければならなかった (Coleridge, *Biographia Literaria*, Ch. 14)。

その点で『復楽園』は、『失楽園』とは別種の要求に対応しうるものであった。『復楽園』には人としてのイエスが登場するだけである。『失楽園』のように贖罪や復活、キリスト教の教義が取りあげられることはない。地上に生きた人間として、その生き方が問われるだけである。もっとも、イエスはその死後、彼は神であったといわれる人物である。その点では闘士サムソンの方が、欠点だらけの現実の人間である。イエスもサムソンも聖書のなかの人物ではあるが、教義に関わりなく、その生き方が追求されている。

しかし生きるとは、たちまち善悪の選択である。『失楽園』のなかにもアダム以前に、その選択を強いられた人物

（？）がいる。

アブディエルの反逆と帰順

アブディエルの反逆は、二・二六事件に巻き込まれた下級兵士を連想させる。軍隊の掟は、上官の命令に対する絶対服従である。いつものとおり非常呼集に従ったまでである。だが気付いてみると、それは反乱の挙兵であった。つまり神が御子を摂政名代に「高挙」したあの夜、セイタンは直属の部下を誘いこんで、反乱を企てたのである。

嫉妬のあまり眠られぬセイタンは、腹心の部下であるベルゼバブを起して、われわれは互いに腹蔵なく語り合う仲ではなかったか、寝ても覚めても心は一つのはずだ、今回の新しい法（おきて）をどう思うか、と持ちかける。支配者から新しい法が出された以上、仕えるわれわれの側にも新しい心構えが必要だ、不測の事態にそなえて協議しなければならない、だが、ここでこれ以上のことを論ずるのは危険だ、だからわが指揮下にある天使全軍の首領株を集め、「神の命令」によって、わたしも、わたしの指揮下にある全軍の者も、夜の明けきらないうちに、北にあるわれわれの領地に飛んで帰り、われらの王・偉大な救世主（メシア）を迎える饗応の準備をしなければならないことになった、彼はあらゆる階層の天使の間まで出向き、新しい法を伝えようとしているからだ、と伝達してくれ（五673―693）という。こういうふうにセイタンは、言うべき口上まで教えたのである。

不用意な胸中に不埒な考えを吹きこまれた副官ベルゼバブは、彼の指揮下にある指揮官たちを、多数同時に、また個別に呼んで、「いと高き神の命によって」夜が明けきらないうちに、「われわれの大天使旗が移動することになった」と伝える。「理由については指示どおりに語るが、合間合間に曖昧で不満げな言葉をさしはさみ、その誠実な心

に探りを入れたり、あわよくばそれを惑わそうとする」（五694―704）。このあたりの動詞は歴史的現在形を用い、夜陰に乗じて、洩れなく反乱に巻込もうとする陰謀の切羽詰った雰囲気を、その臨場感のままに写し出している。

「しかし、一同はただひたすら従来通りの合図と自分たちの偉大な指導者の権威ある声に従った」（五704―706）。それほどセイタンの名は偉大であり、天における彼の地位は高く、星の群れを牧する暁の明星のような、その容貌に魅了されて、実に全天使の三分の一が彼に従った。アブディエルはこうして反乱軍のうちに巻込まれていった軍人であった。

セイタンの領地が北方にあり（五689）、そこに神の国に拮抗する王国を築こうとした（五726）。これはイザヤ書一四章一二―一四節「ああ、お前は天から落ちた、明けの明星、曙の子よ。お前は地に投げ落とされた、もろもろの国を倒した者よ。かつて、お前は心に思った。「わたしは天に上り、王座を神の星よりも高く据え、神々の集う北の果ての山に座し、雲の頂に登って、いと高き者のようになろう」と」の記事に由来する。

その他、エレミヤ記（一14、四6、六1）にも「北から災いが襲いかかる」とあり、シェイクスピアの『ヘンリー六世　第一部』第五幕第三場の冒頭でもセイタンが「北方の魔王（the lordly monarch of the north）」と呼ばれている。漢字の「北」にも「にげる、そむく」の訓があり、「敗北」を連想させるのも不思議である。

ここまでは、神の命令と偽って大軍を連れ出してきたが、これからはいよいよ反逆に向かわせなければならない。そのためにセイタンは、やはり彼らの「誇り」をくすぐるよりほかに手はないのである。われら天使の厳（いかめ）しい称号（五773）も、キリストの油注がれた王という名の下には陰ってしまう、いまだかつて行なったことのない跪座の礼（五

782)、すなわち醜悪な平身低頭の礼を、神一人のみか、神の像にすぎないもう一人の者にまでしなければならない(五608は神の命令、五782はセイタンの反復)、これはとうていわれわれ自由な天の住人、天の子(五790はセイタンの言葉、五600では神によっても光の子)と呼ばれた者には耐えられないことである、何ものにも隷属せず自由な者、同等ではないにしても同等に自由であり、権力と栄光において劣るとはいえ、自由において同等なる者が、いかなる理由で、権利においても同等であるはずなのに、かかる拝脆を求められるのか、そんな謂われはない、というのである。'Equally free' (l. 792) といい、'In freedom equal' (l. 797) と繰返す、この同等という取り憑かれたような物言いは、セイタンの執念をあらわす。

これに猛然と反論したのがアブディエルである。反論の第一は、「汝は神に対して律法を課そうというのか(Shalt thou give law to God?' V. 822)」という点である。律法を理性といいかえても同じことである(「律法(おきて)としての理性」六41、42)。神の決定権(arbitrariness)を認めないのか、ということである。ここにミルトンを主意主義者と呼ぶ最良の証拠がある。創造主は絶対的(すなわち完全に自由な)存在であるから、彼に注文をつけることはできないのである。

第二は、「経験によって(by experience' V. 826)」、神がいかに善であり、われわれの善についても地位についても配慮に富み、一人の首(かしら)のもとに団結して幸福を増進させようとしているかを知っている、という。ここに英国固有の経験論に裏うちされた主意主義を見ることができる。

第三は、「汝自身を…御子と同等だ…と思うのか?('Thyself... dost thou count.../ Equal to him, begotten Son?' V. 833–835)」という反論である。全能の父は、その御言葉によるが如く、実にあの御子によって、万物を、汝さえも、造りたもうた(五835—837)。実はミルトンは『失楽園』全巻にわたって、創造も、セイタンの追放も、人間の贖罪・救済も、最後の審判も、すべてキリストに実行させている。神はキリストこそ主('Lord', V. 608)と定め、摂政(vicege-

rent', V. 609）に任じたのである。だから「彼に背く者はとりも直さずわたし（神）に背く者であり・・・神と至福直観から追われて、いや果ての暗黒の奈落に呑みこまれ陥るのだ（'Him who disobeys/ Me disobeys. . . / Cast out from God and blessed vision, falls/ Into utter darkness, deep engulfed. . . ' V. 611–614）。父と御子は同等なものとして描かれている。

第四は、そのような身分のキリストがみずから身を落として、われわれの一員となられたのだ。だから御子の律法はわれわれの律法となり、彼の受けたもうすべての栄誉はわれわれ自身の栄誉となって帰ってくる（五842—845）。

だから、不敬な憤恚（いかり）を鎮め、他の者を誘惑することをやめて、すぐに、怒っておられる父と御子の慈悲に縋るべきだ、時機を失しないかぎり御赦しを得ることもできよう、と熱意をこめて説得する（五845—848）。

それは情理ともに兼ねそなえた諫言であったが、誰の賛成も得られないどころか、奇矯・唐突な発言として無視されてしまった。これを見て喜んだのは背教の天使セイタンで、ますます増長して発言をエスカレートさせる。われわれが造られたものだ、とお前は言うのか？　しかも父からその子へと仕事が移され、その二番目の者の手によって造られたのだ、というのか？　なんと奇怪かつ斬新なる意見！　どこからそういう教義を学んだか知りたいものだ！　この創造の仕事が営まれたとき、誰かそれを見ていたのか。創造主がお前に生命を与えられたとき、自分が造られたのを覚えているのか。われわれが現在のように存在しなかった時を知らないし、われわれより以前に誰が存在したかも知らない。運命の流れが一めぐりしたとき、自分自身の生命力によって生まれ、自ら出現した者、故郷であるこの天国に、機熟して誕生した天上の子等なのだ。われわれの力はわれわれのものだ、と（五853—863）。

神がセイタンを含め万物を造った、というアブディエルの創造説を否定すれば、セイタンには万物の自然発生説しか存在しないわけで、それがここによく表現されている。かつ、創造説は使徒信条の第一項にあることによっても分

かるとおり、信仰によってのみ可能である。信仰のないところでは自然発生説しか残らない。これは現代の哲学においても変らない。

セイタンは、自分がキリストに匹敵する実力を有することを証明してみせると豪語し、悪い邪魔が入らないうち早々にキリストのところへ飛んでゆけ、と脅迫する。アブディエルは唯一人、臆することなく所信を披瀝し、反乱軍から立ち去っていった。第五巻はここで終る。

第六巻はいよいよアブディエルの反撃である。一夜明けて平原一面に燦然たる隊伍を組んで密集した神の天使の軍勢は、たった一人帰順したアブディエルを歓呼の声をあげて迎え入れ、神の王座の前へつれてゆく。すると黄金の雲のなかから、神の声（the Sovran Voice, VI. 56）が響く（神は声のみ聞こえ、姿は見えない）、「神の僕よ、よくやった！誰よりもよき戦いをよく戦った。無数の反徒を向こうにまわしてたゞ一人、真理の大義を守り、……真理の証のために、暴力よりもなお耐えがたい衆人の非難に耐えた」（六29—35）、そして今や、嘲笑を浴びながら立ち去る困難さに比べたらはるかにたやすく、味方の大軍に援けられ、力によって敵を征服する栄光が待っている（六37—41）、と。

かたや北方の地平線上にはセイタン麾下の大部隊が集まって、進軍を開始。かつては「あんなにもしばしば心を一つにして喜びと愛の祭りに相集い、一人の大いなる父の子等として、その父を、永遠なる神を、声をあげて賛美するのが常であった」（六93—96）天使同志が、敵と味方に分かれ、まさに乾坤一擲の戦いを戦うことになった。偶然双方の最前線で接触する羽目となったセイタンとアブディエルが互いの思いをぶつけあう、あたかも一騎打ちの前に名乗りを上げるかのように（このなかにアブディエルの'God and Nature bid the same,' VI. 176. という有名な言葉がある）。こうして戦端は開かれた。

アブディエルが大きく振りかぶって一撃を加えると、セイタンは十歩退き、十歩目には膝をつくが、かろうじて槍で身を支える、というあたりの描写（六189—198）はあたかも活劇を見るようだ。これを皮切りに一挙に両軍は凄じい勢いで、激烈な白兵戦に移った。

三日間にわたる戦闘の第一日目、最大の見せ場は、総大将同志、「神に似る者」を名とするマイケルと「反逆者」セイタンの一騎打ちである（六262—353）。先ず音吐朗々たる口上を言い交わして後の激突は合戦記か軍記物のおもむきがある。セイタンは深傷（ふかで）を負い、楯に乗せて運ばれるが、もともと不死身の天使の体で死ぬことはありえない。

副将ガブリエル（「神の子」）は敵の副将モーロック（「王」）を破り、ラファエル（「神の癒し」）はアズマダイ（「破壊者」）と、ウリエル（「神の炎」）はアドラメレク（「偉大」、太陽神）と渡り合う。アブディエル（「義の僕」）の相手は、アリエル（「神の獅子」）、アリオク（「獅子の如き者」）、ラミエル（「神の雷霆」）の三人である。それぞれ格の近い、相応しい相手と戦っている。

破れたりとはいえ不死身の天使の身である。その夜セイタンは軍議を開いて新兵器を考案したことを披露する。すなわち大砲の発明である。反乱軍は全員徹夜の突貫作業で大砲を完成した。

第二日目、新兵器の威力に自信をもつ反乱軍は不敵な余裕をみせ、マイケル麾下（副将はガブリエル、六45—46）の天使軍に迫る。嘲笑的な言辞を弄すると同時に、轟く大音響とともに「悪魔の反吐（へど）」（devilish glut, VI. 589）ともいうべき弾丸を打ちこむ。天使は元来その体形を自由自在に変え、収縮も拡大もしうるものであるが（一424—431）、なまじ鎧をまとっているばっかりに攻撃をかわすことができず、何千となく下位の天使が上位の大天使の上に倒れかかるという有様（六593—597）、これは武装の限界を如実に示すものとして示唆的である。ともあれ、弾丸の猛威はすさまじく、天使といえども敗退は不可避であった。しかし反乱軍の優勢も束の間で、激しい怒りに駆られた天使軍は武器を投げ

すて、山の方へ飛んでゆき、両手で山々を、その岩・滝・森もろとも引き抜き、持ち上げ、三列に並んだ大砲の上へ投げつけた。反乱軍が頼みの綱とした大砲も重い山の下に深く埋められ押し潰されてしまった。彼らの頭上にも黒々と山岳の尾根が降りそそぎ、生き埋めの苦痛を味わった。

残りの敵は天使を真似て、近くの山を根こそぎ引き抜いて投げ返した。かくして両軍が互いに投げ合う山と山とは空中で衝突し、地底深く暗黒のなかで戦っているような凄じさだった。何しろ全天使の三分の二（六49）がこの戦闘に参加しているわけだから、このままでは天はすべて荒廃に帰したかもしれない（六669—670）。

反乱軍も罪を犯したためその力が損われているとはいえ、まだ神の裁きをうける前であるから、天使軍と等しく神に造られたものとして十分に拮抗する力をもっている。したがって彼らに任しておけば、手段をつくしての死闘となり、永久戦争（perpetual fight, VI. 693）に決着はつかない。

そこで、二日間にわたるこの戦いを見た「全能の父」（六671）なる神は「御子」（六678）に向かって、「第三日」（六699）は汝に委ねるがゆえに、この戦いを終息させよ、そうすることによって天国と地獄のすべての者に汝の比類なき力を示し、万物の世嗣であり王であることを示せ（六705—709）、と語る。

この三日間の戦闘で、第一日は、叙事詩が英雄詩といわれるのも宜なるかな、古典叙事詩さながら英雄同志の合戦である。二日目は反乱軍が新兵器を造りだしての巻き返しであるが、それは本来「草木や果実や馥郁たる花や宝石や黄金で美しく飾られた」（六475）美しい自然の腸（はらわた）を抉り出すような醜い環境破壊と自然破壊を引きおこすものであった。かかる近代的科学技術が、自然からの復讐をうけずに済むわけがない。ミルトンはこういう近代文明の行く末を予見していたかのようだ。

ここに興味ぶかい証言がある。マージョリー・ニコルソンが第一次世界大戦直後、ミネソタ大学で特別枠の復員学生のクラスを担当していた時のことである。ひとりの所謂復員特別生（War Specials）の学期末レポートに彼女は眼の開かれる思いをした。ヨーロッパの実戦から帰ったばかりのその学生は、戦後溢れるように出版された戦記物はあまねく読み、彼の実戦体験と照合してきたが、ようやく『失楽園』第六巻に巡り会って満足した、彼が実際に経験した戦闘場面や、夜間塹壕のなかで明日は敵がどんな新兵器を繰り出してくるかと、敵味方接近した布陣のなかで不安にかられて想像したことをすべてここに見出した、とくに大砲に関しては投げつけあう山という比喩が最もよく納得できた、戦闘においては、新旧を問わず、あらゆる破壊手段が無差別に使われるものだ、と記していた。また特にニコルソンの印象に残った指摘は、ミルトンが音に優れた詩人で、その学生の耳には、セイタンの大砲の音がドイツ軍の怖ろしい砲撃の轟きのように反響した、ということであった。ニコルソン教授は『失楽園』第六巻に対する、この学生のレポートを忘れることができず、次世代の学生に語り伝えている、という（Marjorie Hope Nicolson, *A Reader's Guide to John Milton*, pp. 259-260）。

二日間にわたる戦いの結果は、天国とはいえ目を覆いたくなる荒廃ぶりである。第三日、この窮状を救う仕事は、救世主（メシア）としての御子を措いてほかにはなく、彼に委ねられる。なんと自然は、御子の出陣と聞いただけで、再び元の美しさに自から戻っていった。根元から引き抜かれた山々はおのおの元の場所に帰り、山も谷も、鮮かな花に彩られて微笑んだのである（六781—784）。自然の治癒力といわれるものも、自然だけでは足りず、超自然の力（Power Divine, VI. 780）を必要とするのだ。おのずと浮んでくるのは「恩寵は自然を完成する（gratia perficit naturam）」という言葉だ（岩下壮一『中世哲学思想史研究』426）。

しかしこの光景をみて反乱軍はいっそう頑なになり、愚かにも「絶望から希望を懐いて（hope conceiving from despair, VI. 787）」兵力を再結集する。

In Heavenly Spirits could such perverseness dwell?　　VI. 788.
（天使にこのような依怙地な心があろうとは？）

傲慢な者を説得し、頑固な者を改悛させる手段はない。相手の栄光は見るにたえず、その姿に憎悪を感じ、同じ高い地位に着こうと野心満々、陣容をたて直し、ついには全軍悉く玉砕覚悟で、最後の決戦に臨んだ、逃亡はもとより、弱気を出して退却することはその蔑むところであった（六789—799）という。この描写は先の敗戦最後の日々を経験した身にはあまりに切ない。

thunder 考

さすがの御子もついには怒りに満ち、恐ろしい表情に変った。右の手に摑んだ最終兵器は「雷霆（いかずち）（thunder）」であった。出陣に先立ち父は御子に、彼の「全能な武器（almighty arms, VI. 713）」として「弓と雷（bow and thunder）」を与えた（ここでは雷は単数）。いざ戦場に向かうときには「弓と三箭の雷の入った箙（bow/And quiver with three-bolted thunder, VI. 763–764）」を携えていた。そして直ちに敵軍の真只中に乗り入れ、「右手にしっかと千の十倍もの雷を摑み（in his right hand/Grasping ten thousand thunders, VI. 835–836）」、前方に向かって投げつけた。それが敵軍一人一人の魂に恐るべき一撃となって突き刺さっていった、ことはいうまでもない。しかし御子

は、まだその力の半分も出していないのに、急に途中で雷霆を投ずることをやめてしまった（he... checked/ His thunder in mid-volley, VI. 853-854）。彼らを滅亡させるのではなく、天国から根こそぎ追放するのが目的だったからである（雷は再び単数）。

ここで指摘したいことは thunder→three-bolted thunder→ten thousand thunders→thunder という変化である。最初と最後は集合名詞としての単数であり、「三箭の」というエピセットは華麗な軍装を描写したかったのであろう。「千の十倍もの」といったときは、戦闘のさなか、雷を弓に番（つが）える暇もあらばこそ、右手で直（じか）に、投げ矢のように投げつけている、その実戦の激しさを表わしている。私が数にこだわるのはルーベンス（一五七七―一六四〇）の一枚の絵のせいでもある。リヨン美術館の「キリストの怒りから世界を守る聖ドミニクスと聖フランチェスコ」（一六一八―二〇頃）で、ここでは裸身に緋色のローブをまとっただけのキリストが右手に three-bolted thunder をかざして、蛇がとりまく地球を撃とうとしている。『失楽園』ではまだ地球誕生以前の出来事であるから、事情は大いに違うが、怒りに満ち溢れた猛々しいキリストの絵は稀である。

日本語でも「雷」は文字どおり「神鳴り」の意であり、「いかずち」と読めば「いか（厳）つ（＝の）ち（霊）」であるという（『大日本国語辞典』）。また一説には「イカは怒の義、ツチは槌で、撃つの意」とも、「怒って土に落ちるから」ともいう。諸説とも「イカ」は「厳」か「怒」かに分かれ、「ツチ」は「霊」「祇」「槌」「土」「持」等に分かれる。いずれにしても厳粛な審きを含意する。『大言海』には、「厳之霊（イカツチ）ノ義…上代ノ人ハ、厳（イカ）ク畏ルベキ神トシタリ、サレバ、直チニ神（カミ）ト云ヒ、鳴神（ナルカミ）トモ云ヒキ」とあって、いっそう神秘的な解釈をしている。

それはギリシア神話においても同じで主神ゼウスは「本来天空とその輝やきを表徴する神格」であるから、「天空を司配する主神として…雷電をその意のままに駆使する者」であり、ホメーロスのなかには「高く雷鳴を轟かす

者」「雷霆を転ずる者（悦ぶ者?）」「電光を投げる者」「烈しく鳴り轟く者」など、もっぱらこの面から把握されたゼウスの姿が見出される、という（呉茂一『ギリシア神話上巻』59ページ）。

聖書における用例はあまりに多いので、旧新約からそれぞれ代表的な一例だけをあげる。旧約では詩篇十八篇七節以下の「主の怒り」を表す箇所である。「主は天に雷をとどろかせ、いと高き神が御声をあげられると、雹と火の雨とが降ってきた。主は矢を放って彼らを散らし、稲妻をひらめかして彼らを打ち敗った」（13—14）とある。欽定英訳では‘The Lord also thundered in the heavens, and the Highest gave his voice; hail *stones* and coals of fire. Yea, he sent out his arrows, and scattered them; and he shot out lightnings, and discomfited them.’

新約ではヨハネ伝一二章二七節以下、天からイエスに語りかける父の声を群衆が雷と思う箇所だ。イエスは死を前にして心騒ぎ、「父よ、わたしをこの時から救ってください…しかしわたしはまさにこの時のために来たのだ。父よ、御名の栄光を現してください」というと、天から声が聞こえ、「わたしは既に栄光を現した。再び栄光を現そう」という。そばにいた群衆はこの声を聞いて「雷が鳴った」といい、イエスは、この世の審判、この世の支配者が追放される時を示すものだ、という（ヨハネ一二27—30）。ここでも欽定英訳は‘The people. . .said that it thundered.’と動詞形である。

『失楽園』第六巻、反乱軍は敗れて地獄に落とされる。こうして第六巻の終りは第一巻の始まりに続く。全十二巻のうちの六巻までで物語は一巡する。文字どおり第一巻は「事件の中程（in medias res）」から始まっていたのである。地獄へ落とされた経緯を語るラファエルは、セイタンがアダムの幸福を嫉み、自分と同じ背きへ誘惑し、神に報復しようと計画していることを警告する。こういうふうに『失楽園』の前半六巻を費して、ミルトンは、生まれてまだ罪を知らぬ人間が、神と悪魔という強力な磁場のなかに立たされていることを示す。

しかし神と悪魔の存在を二元論として把えてはならない。もともとすべてのものは、一つの原質料から造られている。だからこそ、天上と地上と、この二つの世界に存在するものは本質的に同じで、地上で考えられているよりも遥かに相互に似ている。ラファエルも霊的なものを物的なものに擬(なぞら)えて話すことができた。天国の自然も美しい草花に彩られている点は地上と異ならないが、反逆分子の手にかかれば、その腸を抉り出され、大砲のような大量殺戮の破壊兵器を産み、二十世紀の世界大戦と見紛う非人間的な消耗戦が演じられる、本来静謐平穏であるべき天国において。このとき神は天国のどこに疎開していたのかしらと思わせる、ずいぶん大胆な天国観である。

また、超越界に住む者の、互に営む社会関係も、個々の性格も、新世界である地球の住民とさして変らない。『失楽園』の後半に登場するのはアダムとイーヴの二人だけであるのに比べ、前半の反乱軍の方が、多彩な生身の人間像(?)を遥かに多く提供している。本来霊的な天使であるとはいえ、身につまされるような人間模様である。

その筆頭がセイタンである。「第一位の大天使ではないにしても、第一位の階級に属していた(五659—660)」。自分でも「あまりにも高い地位に挙げられていたために、もう一歩高くなれば最高の天使になれる」(四49—51)と思いこんでしまった。「もし生まれつきもっと身分の低い天使であったなら、幸福な生涯を送りえただろう」(四58—60)という述懐にいつわりはない。

だがトップ集団にありながら第一位でなかったという事実は心理的に興味ぶかい。神に次ぐ天使には自足の思いがあるが、それに達しえない天使に嫉妬の思いが宿る可能性は大いにありうるからである。それにしてもマイケルとは対等の地位で(六690)、合戦も互角に渡り合った(六262—353)。そのような高位から、神に最も遠いところまで落ちてし

まった、まさに天国と地獄の距離である。その落差の最も大きかった天使である。失った栄光を嘆く独白や、アダムへの羨望に身を焼く姿は真に迫っている。そのほか、地獄でその名を挙げられている天使たちは堕天使とはいえ、ベルゼバブもモロックもベリアルもマンモンも、それぞれそれなりに名を残したといえる。私が興味をもつのは、そのほかの無数の無名の天使たちである。

無名天使

セイタンがひとり地球の偵察に出かけることが議決発表されると、セイタンが戻ってくるまで、無名天使たちも暫しの余裕と休息をえる。地獄の業火もいくらかおさまり、そこでの暮しにも馴れてくると、先行きに不安があるとはいえ、戦争の緊張から解放されて各自それぞれ好むがままに時を過ごす。馬上競技を楽しむ体育会系あり、敗戦の傷手を美しい悲歌にうたう芸術会系あり、袋小路の難解な思索に耽る哲学者流あり、安住の地を求めて辺境をさぐる探検家あり、おおよそ、こういう場合に考えられるあらゆる性格の類型が出揃っている（二506—628）。

ラファエルはこういう無名の天使たちについて、次のようにいう、キリスト側の天使たちは神に選ばれたのであるから、天における名声で満足しており、人間から称賛されようとは思っていない、しかし、反乱軍の天使たちは力においても戦場の働きにおいても驚嘆に価し、また名声を求める熱意も劣ってはいなかったが、神の定めによって天と聖なる記憶から抹消され、暗い忘却のうちに名もなく住まわされている、いかに有力なものも真理と正義から逸脱すれば、称賛に価せず、軽蔑と恥辱を受けるのだ、まして虚栄心にかられて栄光に憧れ、不名誉な手段を用いて名誉を求める、とすれば、永遠の沈黙がふさわしい定めだ、と（六373—385）。

これはラファエルが神からアダムへ遣わされた使者として、公式に表向きはそう言わざるをえなかった警告である。だが、実戦の体験者で、軍人の階級においてはマイケルやガブリエルには遠く及ばなかったラファエル（六363）なら、

敵ながら天晴れとその武勇を認める、嘗っての仲間が天国の記録から完全に抹消されることに惻隠の情を感じなかったとは思えない。現に「かつて天上にあって栄光に輝き完全無欠であった多くの天使たちの破滅を、悲しみの心なくして語りえようか」（五566―568）といっているのである。

かくて、『失楽園』は第六巻で一つの世界が完結し、前半は後半に対して空間的には磁場を、時間的には予型を提供している。つまり、後半においては人間が神と悪魔の綱引きの上に立たされることになると同時に、セイタンの堕落が人間にとって前例としてよき教訓になるということである。

セイタンと彼が率いる反乱軍の天国からの追放と地獄への墜落は、一つの審きではあったが、最後の審判ではない。彼らの最終の運命がどうなるか、ラファエルと同じように、ミルトン自身が革命における多くの無名戦士の死を知っていたはずである。それを償う途が最後には用意されるはずである。（続く）